

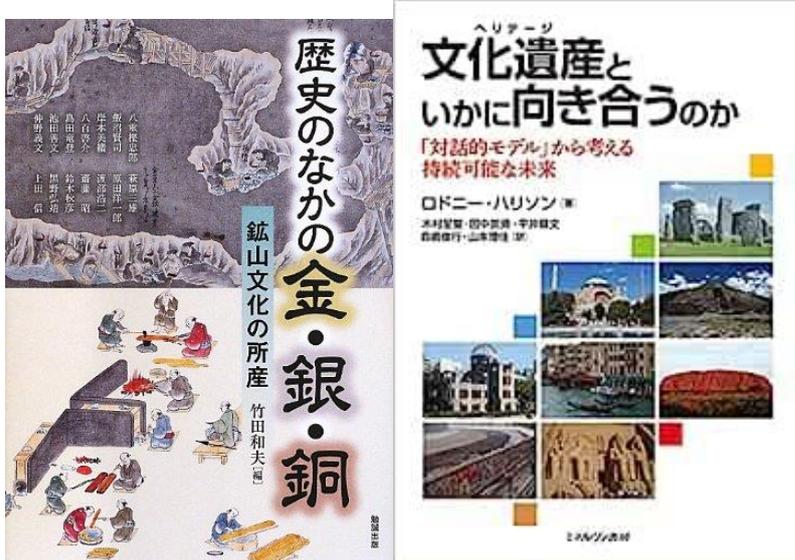
東京大学韓国学研究所連続講座・日韓の「歴史問題」の論点を探る

第19回 「佐渡島の金山」世界遺産登録を考える 竹田和夫

(新潟大学非常勤講師 棚田学会理事)

(鉱山史+棚田学 文化史 文化財保護実践 高大歴史教育)

はじめに 日本政府がユネスコに世界遺産登録を申請した「佐渡島(さど)の金山」をめぐり、インドでの国際委員会の審査を前に、佐渡市や新潟県ではきわめて深刻な問題が進行している。『歴史学研究』2023年3月号月報「佐渡世界遺産登録をめぐる-地域知の危機」同2024年6月号月報で「佐渡世界遺産登録をめぐる諸問題-これまでの経緯について」と題して報告したが新しい問題は日々拡大している。もし登録が順調に進行したとしても問題は解消されない。本報告では地域や地域史の視点から佐渡世界遺産の課題を整理したい。東京大学では昨年度学部生院生にこのテーマの話をさせてもらったが、24年間にわたり「棚田の多面的意義」と「鉱山景観と鉱山社会の多様な性格」について①新潟大学生(全学対象のものとは社会科・地理歴史科教育法の双方)②國學院大学生 2014年度集中講義③県立高校生④交流のため来日したマレーシアの高校生など、次世代と対話しながら学際的に考えてきた。成果が下記左下の本である。近年は右下の本を参考に対話色を強めている。2005年2月15日火曜日新潟日報・私の視点「金山の遺産登録県民一丸で」、そして大学生との対話の一部は2022年3月4日朝日新聞デジタル「私の視点世界遺産推薦の議論 地域の未来 次世代の声も」に掲載された。高校生との対話は『歴史と地理』(通号625)2009年6月号所収「教室レポート 高校日本史と大学講義の接続実践(1)文化財(世界遺産)を素材に(日本史の研究(225))」を参照されたい。



ここで紹介したい本がある。竹田が新採用の頃に読んだ岩本由輝『対話「東北論」』福武書店である。同書では東北と対比する存在として佐渡をあげる。流刑と鉱山にとどまらない佐渡の文化の析出を提起しています。⇒佐渡史学会『佐渡史学第7集近世特集』1971年の論考をみると、鉱山や流人だけではない広範な関心が寄せられている。佐渡では佐渡高校の教員や博物館の学芸員が核となり多くの島民参画の研究会や事業が展開していた。参加者は参考書を持参し豊富な知識と鋭い質問を講師にあびせている。これぞ佐渡の学知であった。しかしいまは牽引した世代が引退・逝去し後継者がいない。

竹田が県立歴史博物館の展示シナリオの作成時(このとき学芸員は配置されておらず)新潟県の歴史・文化の特徴、越後・佐渡それぞれの歴史・文化の特徴を思案していたとき上記の本や指摘は導きとなった。「海流の中の佐渡文化 古代・中世は大陸・朝鮮半島・隠岐・能登から 近世は蝦夷地・津軽・秋田から」と想定し、佐渡の特徴は時間差文化複合である！と仮説を立てた。

⇒提起A：①鉱山の文化+②周辺に広がる棚田開発・文化+③信仰をセットで案出した。

東京大学文学部国史研究室石井進(初代棚田学会長)のところに内地留学してから棚田学に関心を持つようになり佐渡の棚田は鉱山と表裏の歴史の変遷をたどった認識した。そして佐渡の鉱山史を見直した。戦前は鉱業史研究がさかん 戦後は鉱山経営史や鉱山技術史が主流。その一方鉱山労働の研究もあるが上記の有機的関連は成功していない。近世史研究者佐々木潤之介は「鉱業における技術の発展」『技術の社会史 2』有斐閣 1983年において鉱山の歴史全般について、経営史と科学史の2つの系列を個別鉱山の研究を通し社会史として統合し再構成する必要性を説いた。佐々木はその他『岩波講座』論文でも近世佐渡鉱山の技術について独自の位置づけをしている。

提起B：佐々木の視点に「鉱山文化」「労働その他の社会問題」の視点の導入+「地域史」への敬意+山口啓二『鎖国と開国』で示された佐渡鉱山と南ドイツとの技術関係のような「グローバル視点」。その際には次世代との対話や教育のテキスト記述からの分析。前掲の竹田編著は第一歩。編集者勉誠出版黒古麻己氏の理解に謝意を表したい。

提起C：鉱山は負の性格のるつぼ 鉱山の有する過酷で劣悪な労働環境、事故・病気、環境破壊、公害などの負の性格を指摘し、反面多彩な遊興・娯楽文化が開花した場でもあったと整理。竹田「世界史」「日本史における金銀銅研究の可能性」『歴史評論』799号、2016年参照。

1 佐渡鉱山の世界遺産登録申請への経緯をトレース！

問いかける次世代メンバーAさん：東京の大学生 Bさん：新潟の大学生

Cさん：マレーシアの高校生 Dさん：新潟の高校生

東京の大学生は問いかけてました登録の動きはどのように推移したの？

平成 19 年 12 月 19 日	世界遺産暫定一覧表記載資産候補提案書を提出 ※2009 年
平成 22 年 6 月 14 日	世界遺産暫定一覧表に記載(「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」) ※2010 年
平成 22 年 10 月 6 日	世界遺産条約関係省庁連絡会議で世界遺産暫定一覧表への追加記載了承
平成 27 年 7 月	国文化審議会世界文化遺産特別委員会で平成 27 年度の推薦候補見送り ※2015 年
平成 28 年 3 月	推薦書原案(改訂版)を国へ提出 ※2016 年
平成 28 年 7 月	国文化審議会世界文化遺産特別委員会で平成 28 年度の推薦候補見送り
平成 29 年 3 月	推薦書原案(改訂版)を国へ提出 ※2017 年
平成 29 年 7 月	国文化審議会世界文化遺産部会で平成 29 年度の推薦候補見送り ※2018 年
平成 30 年 3 月	推薦書原案(改訂版)を国へ提出
平成 30 年 7 月	国文化審議会世界文化遺産部会で平成 30 年度の推薦候補見送り
令和 2 年 3 月	推薦書原案(改訂版)を国へ提出 ※2020 年
令和 3 年 3 月	推薦書原案(改訂版)を国へ提出 ※2021 年

新潟の大学生：「私たちの先輩たちは 24 年間の佐渡世界遺産登録運動を考える講義を受講しながら以下について指摘してきました。それをたどり、同時に佐渡の地域史も調べてみました。」…佐渡市・新潟県内では 20 年以上佐渡の世界遺産登録推薦に向けて準備がなされてきたが肝心の鉱山遺跡の意義づけの前提となる**鉱山史研究の蓄積が軽視**されてきました。佐渡の場合、**鉱山史(歴史学)や地域史(越後や佐渡)がわかる歴史学者が関与していないがゆえに、「文化財」として、それも「世界遺産」としての価値づけを行う際に歴史認識に対する配慮がなされていない**。国内鉱山では佐渡だけの過酷な水替人足の労働、鉱山社会が生んだ差別の痕跡(非人の史料・牢獄跡・処刑場跡)、事故・病気・環境破壊・公害、近代朝鮮人強制労働問題などの負の側面から目がそらされてしまう傾向があります。これは、国や県の担当者にも近世史・近代史の専門家がいないことが背景にあるようです。後述する基本的歴史的事実の判断がなされていません。私たちが疑問点を質問しても回答がありません。特に佐渡市に顕著です。こうした学際性の欠如の結果、登録運動の当初の宣伝文句であった「**金と銀の島、佐渡**」も、「**金を中心とする佐渡鉱山の遺跡群**」へと変えられてしまったのです。

これはユネスコの委員会を通過しやすくするため、戦略として「**銀の石見**」と「**金の佐渡**」の対照性をアピールするという、文化庁の苦渋の決断によるものでしたが、**歴史的事実にそぐわない**ものです。

新潟の高校生「**高校必修科目である「総合的な探究の時間」(地域課題析出と解決策を提起)に過去の登録運動と県民・市民の関係が変化したとき**いていましたので「**なぜ、どのように登録運動の牽引者が変化したのか?**」を調べてみました。」…運動の草創期の頃の**専門家会議はその後のコンセプトとは異なる視点を提起していた。⇒なぜ変更した?**

本来、新潟における世界遺産登録運動は、行政ではなく大学が牽引し県民への影響力を有しました。新潟大学で博物館学・考古学を担当していた橋本博文さんが中心となり、2007 年「佐渡を世界遺産に！」フォーラムを開催した。「佐渡博物館を核に、街並み・鉱山・トキ・芸術を一連のものとして遺産化し、地域の活性化をはかる」という、アピールポイントを金銀山に限定しない方向性が提起されました。初回フォーラムでは、世界遺産に登録されても観光資源としての価値は一過的である、という厳しい分析もあったそうです。2008 年・2009 年も新潟大学の主催によるフォーラムが続き、他所の世界遺産登録では扱われてこない「**世界遺産教育**」をテーマにするなど、**県民の多様な層を引き込む工夫がなされました**。しかし、2010 年以降はこのフォーラムの主導権が県・市に移り、開催の主眼も、地域への価値づけや登録後の観光を核にした地域像を語ることが中心となってしまった。その結果、**県民・市民よりも自治体や企業関係者が積極的に動員され、参加する層が限定される**という変化が見られます。結成された、佐渡世界遺産登録新潟県民会議という組織の構成員には、**会議名とは裏腹に一般県民は含まれていない**のです。

東京の大学生「**コンセプトと構成資産が変化していますね。**」

新潟の大学生「国内での世界遺産の登録に当たっては、**暫定一覧表への登録も含め、すべて国(文化庁)主導で候補の選定、登録が行われてきました**。2006 年に新たな試みとして、文化庁の公募が行われることとなった。新潟県もこれに応じて提案書を提出したのです。2007 年段階では「**金と銀の島、佐渡—鉱山とその文化—**」というコンセプト、**構成資産は「西三川砂金山・新穂銀山・鶴子銀山 相川金銀山」で再構成**されます。この

後新穂銀山は外され地元は梯子を外されたと落胆したが 2022 年に国指定史跡に指定されました。2010 年の世界遺産特別委員会で「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」という名称で世界遺産暫定一覧表に記載することが決定しました。その後、推薦書案の作成が本格化し、現時点では佐渡を代表する鉱山である西三川砂金山、鶴子銀山、相川金銀山を中心にした構成資産にしぼりこまれました。さらに、膨大な予算をかけ調査報告書作成や講演会などに力を注いできた多彩な近代の遺産群がなぜか外されたのです。この運動の草創期の頃の会議の記録をみても目指す方向性は近世+近代であったことが確認されます。⇒国や県の行政事情で、佐渡鉱山の価値づけのコンセプトが月々変化し、歴史的事実と大きな懸隔が生じてしまいました。

新潟の大学生 「石見銀山と佐渡金銀山の統合の可能性があります。」…文化庁の提案により「世界遺産申請における石見銀山と佐渡金銀山の統合・拡大」が検討されました。「銀」が共通項です。しかし結果的には佐渡の単独申請で進めることとなった。表向きは、「佐渡の独自性が見えなくなるから」という理由でしたが、実情は、新潟県に先立って登録活動を進めてきた島根県が、文化庁の提案に同意しなかったためでした。この段階で、文化庁は石見と佐渡のみならず、全国的視野により金・銀・銅全体を見据えた鉱山の整理選択と統合を行うべきでした。島根県は、日本中世史・近世史はじめ、オランダ・中国・朝鮮との貿易史や流通史に通暁する歴史学者等による学際的委員会を結成し、銀山としての多面的価値づけを行う論文集や、その根拠となる史料集を刊行してました。一方、佐渡では、現在に至るまでこのような動きはないのです。実は石見が逆転的に登録されたとき新聞報道で田中圭一は佐渡には石見にない建物と文献がある。これで世界遺産を目指すことができると力強い発言をしていた。しかし文献の調査・整理は近代の一部以外はされなかった。相川町史の史料を格納した文書館は閉鎖状態。佐渡博物館は所蔵資料の把握さえなされていません。⇒このことを国も県も突合作業していないので知らないのではないのでしょうか。

以下のことも報道で扱われていません。佐渡は複合の鉱山という特性だけでも、世界の中で特異な性格を有しています。さらに鉱山+その技術援用に棚田など水田開発+関連する信仰がセットで残ります。北海道・北東北の縄文遺跡群や無形文化遺産の風流踊のように、共通する特性を冠した「日本の〇〇鉱山群」というコンセプトや拡大統合が案出できなかったのでしょうか。長年全国的鉱山史研究者や佐渡地域史研究者が積み上げた成果から①石見・生野・佐渡・甲斐・伊豆・院内、その他東北の鉱山との知識・技術・ヒトの交流が存在したこと②近世～近代の佐渡鉱山では、他の鉱山とは異なり「金・銀・銅」が複合産出されていたことが、明らかにされてきた。これを踏まえた推薦がなぜできなかったのか。問いかけます。日本イコモス国内委員会に関わっていた識者は「世界遺産はもはや単独で名乗りをあげる時代ではない」と指摘します。

竹田講師 「大学生たちが提起した「群でおさえる」という把握以外にもアナザーコンセプトがあります。これは報道でとりあげられたことがありません。実は佐渡の場合、鉱山遺跡に特化するのではなく、多様な有形・無形の伝統文化まで包含する「佐渡丸ごと文化の島」という登録申請ができた可能性があったことを指摘します。2004 年に日本で開催されたユネスコの国際会議では、従来別々に扱われてきた有形文化遺産及び無形文化遺産を統合し、関連する多様な文化財を広域的に保護しようとする大和宣言が出さ

れました。この世界遺産の有形+無形の統合は国際的に了承されたがいまだ有形と無形の連携が進んでいません。長年ユネスコの事務局長をつとめた松浦晃一郎は、検討の復活を提起しています(同『世界遺産の50年』ブックエンド2022年)。

当時の識者からは、佐渡がこの有形・無形統合の第一号として申請される方向になるのではないかと期待されており、偶然ではあるが新潟大学が主催していた時期のフォーラムのねらいは奇しくもユネスコ大和宣言の内容とも重なります。

⇒この世界遺産の有形と無形の統合の可能性については、文化庁はじめ文化財関係者が言及することはなく、地域にもこの可能性の説明もなく、亡失されています。

東京の大学生「もりあがっているのは行政と観光関係者とときいていますが。」

新潟の大学生「そもそも推薦書が佐渡市民・新潟県民に公開されていないのが大きな問題です。世界遺産登録の対象地域は価値づけの中心となるコアゾーンと周辺地域のバッファゾーンに区分され双方ともに実質本来なかったもの設置は抑えられ、建物の修理についても届出が必要となります。これらの基準も知らされず。維持のための経費負担割合を知らされされない(県が本来の負担割合を出していない)ままに観光振興・地域活性化のバラ色の未来のみが喧伝されています。これらの課題は推薦書が公開されていないと見えてきません。いまでも白川郷などでは登録後に知らされてトラブルがおこっています。ちなみに石見銀山が世界遺産登録をめざしていたときには地元住民に対する説明会を繰り返したそうです。そして住民からは規制や観光公害への懸念から反対の声があいついだようです。

佐渡は一般住民が本音を語る機会がないまま現在に至ります。島内でも遺産登録の資産がない地域や観光の経済効果がない地域の住民からはまず日常的に困っている道路閉鎖や停電や水の確保などの対策が先ではないかという批判のつぶやきも多く存在します。しかしこれについてはマスコミでとりあげられることはないのです。

マレーシアから来日した高校生「島根県のユネスコスクールは世界遺産を核に広範な地域文化維持と活性化に貢献しているときいてきましたが実際はどうなのですか？」

新潟の高校生「教育分野に目を転じてみると、島根県ではユネスコスクールに指定された高校が核となり石見銀山保全活動をはじめ山城整備など地域で多方面に活動している。佐渡にもユネスコスクール指定校はありますが機能しておらず、統廃合が通告されています。また年に一度佐渡世界遺産を題材にした小中学生による学習発表会がおこなわれていますがこれは価値づけの発見のみに終始します。現在学校教育で必修となった総合的な探究の時間では地域課題の析出とその解決が求められているのです。これはESD・持続可能な社会をめざす教育を主導してきたユネスコの本来の方向性にもつながるものです。しかし佐渡世界遺産教育ではこの趣旨が理解されないまま進行している。これもまた地域住民の理解が進まない一つの背景といえます。」

東京の大学生・留学生「国際的報道では佐渡世界遺産登録に向けてトラブルがあるときいてますが実態を知りたいです。」

竹田講師「登録への国際的な疑義・批判は2009年頃から高まります。2021年末から翌年にかけて文化庁・政府内で申請するか否か議論があった。文化庁や政府は当初慎重姿勢でしたが自民党保守派からの圧力で政府はユネスコに提出しました。最新の推薦書は朝鮮人労働の事実の有無が問われる近代部分を外し近世の鉱山に特化します。なぜなら

もともと登録運動スタート時の記録をみると近世～近代は明記されていたからです。

強制労働の事実に言及されたくないための方策と考えられています。県・市主催の講演会では強制連行・強制労働の話は封印されていました。しかしフルヒストリーではない現在の推薦書の内容では他国からの批判は免れません。アジア・太平洋戦争時の佐渡鉱山における朝鮮人強制労働の有無めぐり韓国との関係の悪化がさらに進行しました。これは「明治期産業革命遺産」のうち長崎軍艦島の展示説明の是正をめぐる国際間の見解の相違(政治レベルの摩擦)が大きく影を落とします。しかし政府がユネスコに送った説明では以前のコンセプトをそのまま踏襲しました。まずはこの問題が今回も影響するのではないのでしょうか。韓国側は軍艦島のような中途半端な日本の姿勢を警戒しています。

新潟の大学生「さらに高まる国際批判と別の問題を地元で感じています。これは関心のある教官が話してくれるからです。報道だけではわかりませんよね。」

竹田講師 2022年1月8日に自民党政務調査会や議員連盟の会合に出席した新潟県教育長が強制労働の事実はないと発言した。同年3月10日の新潟県議会で知事は佐渡鉱山における朝鮮人強制労働の記述がある『新潟県史』を「事実だ」とは限らない」と発言します。(竹田和夫『新潟県史』『佐渡相川の歴史』の意義を考える-編纂経緯と資料編・通史における鉱山記述の分析『新潟史学』83号、2022年、参照)。これでは「事実としての佐渡の歴史」を変えてしまい、鉱山史・近世史・地域史の先学が明らかにしてきた仕事、地元教員や地元知識人が中心となる本県独自の自治体史編さんの成果を無視することになります。また県や旧相川町の首長や事務方職員が関与し何重にも点検し、庁内の諸段階で起案・決裁されたプロセスも無視されてしまいます。その後県史編纂関係者への聞き取りや当時の編纂日誌の確認、通史の根拠資料突合は行われていません。

当初推薦書のユネスコへの提出には慎重であった政府は元首相などの保守層からの圧力により提出するに至ります。しかし即時にユネスコから書類の不備を指摘されました。政府は新潟県や佐渡市にはなぜか知らせませんでした。

佐渡市内の博物館では戦時中の鉱山の労働関係の史料閲覧を館長名で許可を出したのに前日急に閲覧できないと研究者に通告する不可思議な事態が起こります。このような異常事態に対して、新潟大学関係者を中心に2022年3月26日に「佐渡島の金山」世界遺産登録推進にあたって日本政府・行政は歴史事実を否定・隠蔽しないでください」の声明が出されます。同9日には強制動員真相究明ネットワークが「佐渡島の金山」世界遺産推薦内容の改訂を求める声明」を出しました。

佐渡世界遺産問題に対して、強制労働を否定する歴史認識問題研究会の意見広告が新聞紙上に掲載されました。同会の西岡力による講演会が佐渡で行われ、「強制労働はなかった」と強調し、行政からの説明を受けていない市民・県民に誤った歴史認識を植え付けました。この研究会の認識の根拠として佐渡の鉱山経営について戦後書かれた社史(現在の所有者は閲覧を認めていないがなぜか県選出の国会議員には見せている)を「一次史料」としてとらえその記述を引用し「なかった」としています。

また故本間寅雄が収集した戦時中の鉱山労働者の史料では「たばこが配給された」「給与がでている」ことから「強制労働ではない」と反論しています。本間による「佐渡鉱山での落盤事故の多さと珪肺の病気一罹患の高さ」も否定し、イメージ先行でなくきちんと検証すべきと指摘しました。しかしこれはすでに田中圭一も『佐渡病院のあゆみ 佐渡厚

生連史』2001年、で詳述し、飯島伸子が社会学の面から『環境問題の社会史』有斐閣、2000年、も明らかにしてきたです。

すでに外国人の強制的労働の存在は自明なことです。地域知の成果や歴史学以外の研究にも目を通してほしいです。1991年の新潟日報と朝日新聞新潟版、NHK新潟放送局では戦時中の朝鮮人強制労働の事実の記事を大きく報道し番組を制作しました。番組は全国放送でも流されました。これに対して 歴史認識問題研究会は戦後社員が書いた社史を「一次史料」とし、労働の文言は字面のみ読み取っているが、歴史学本来の考え方、史料論の手法からみて、疑問です。写真を見ると朱書きでは加筆訂正がなされているように見えます。史料論の原点に立ち返り原本校合が必要でしょう。

鉱山労働者への経営者によるアメとムチ双方の姿勢はすでに近世の「かなこ」制や部屋制度にみられます。それは近代になって官営経営期や三菱経営期で継承されていきます。現在の報道はもっぱら県史と相川町の歴史の戦時中の朝鮮人労働の記述の是非をめぐる議論にのみ焦点をあてるきらいがあります。しかしこれは長く地域に住み、地域の先達から聞き取りをし、地域史・自治体史に学んだ者からすると「何をいまさらすでに以前から自明のことではないか」ととらえています。高校の新科目日本史探究や世界史探究の記述をみてください。以前よりも強制連行・強制労働の記述が明記されるようになっていきます。当然ですが国の検定を通過しています。

安倍晋三(雑誌で「新潟県や佐渡市は最前線で戦え、弾薬は政府が送る」「『新潟県史』は書店の雑誌のようなもの」と発言した。これに対して県も市も講義することはなかった)やNHK解説委員が佐渡世界遺産をめぐる日本と韓国の関係を「歴史戦」と呼びマスコミも多用するようになりました。

2022年5月佐渡で朝鮮人労働者について学ぶ会が、8月27～28日にかけて、第14回強制動員全国研究集会(主催＝「強制動員真相究明ネットワーク」(以下、「真相究明ネット」))が新潟市内で開かれました。この後、同会の竹内康人『佐渡鉱山と朝鮮人労働』岩波書店が発刊されました。

2023年産経新聞一面及び社説で「新潟県の高校では佐渡鉱山の強制労働が教えられているが政府見解と異なるものであり、偏向している」と攻撃されました。強制連行・強制労働が明記されている国の検定済の教科書に基づいて授業をしている良心的教育者に大きな衝撃を与えました。

同年4月に韓国最大野党の国会議員らが来日し、歴史研究者と意見交換し、また5月に戦時中、佐渡鉱山(新潟県)で強制労働させられた朝鮮人労働者の遺族の証言を聞く集会(主催＝韓国・強制動員の証言を聴く集い実行委員会)が佐渡市あいかわ開発総合センターで開かれました。

この日のために韓国から来日した元鉱山労働者(故人)の息子(70歳)は佐渡鉱山に動員されたすべての人の記録が遺族に伝えられ、痛ましい歴史を記憶し、追悼できるようになることを願う」と話しています。

同年5月歴史認識問題研究会が「佐渡金山強制連行・強制労働の現場ではない、日韓研究者の声明文」をユネスコに提出しました。

新潟県立文書館で県史編さん時に撮影した佐渡の鉱山労働の史料閲覧や目録の閲覧ができないことが研究者の指摘で明らかとなり、このことも含め史資料が処分されることないよ

う県内の歴史学関係の団体代表名で文書館に要請書が出されます。

この史料閲覧問題は2023年12月と翌年4月の二度にわたり朝日新聞コラム多事奏論(執筆田玉恵美)でとりあげられ、全国に衝撃を与えた。

2023年には、県の特設サイトに、事実と異なる誤った記載があったことが判明した。戦時中佐渡の鉱山で亜鉛と鉛を生産したとしていたが実は銅でした。

2 推薦書の内容の問題点 きわめて残念なことであるが世界遺産登録の推薦書の内容全体を知ることができない。公開されていないからである。価値づけのみならず、登録地域の今後の具体的整備、特に住民生活とどうかかわるのか知る必要があるので公開は必要であろう。このような制約された現状では国や県・市が発行する広報(推薦書内容の要約が掲載されている)に依拠して分析せざるをえない。今回は文化庁の広報「佐渡島(さど)の金」を対象とし、そこで示される「資産概要の説明」について授業や講義で疑問を感じた次世代が問題点を整理し指摘したい。

新潟の高校生「この説明を読んでいると世界史や日本史の教科書・図説の説明とずれがあることに気づいたので担当教員に質問しました。」

新潟の大学生「われわれの大学は理学部・農学部の実習体験や全学のダブルホーム活動で佐渡にはしばらく滞在することがありますがそこで読んだ地元自治体史の内容とこの説明は異なります。まずコンセプトの主題である「佐渡島の金」ですがこれからして首をかしげます。現在の推薦書が対象とする近世に限定すると採掘の主流は金・銀・銅の複合です。地域の近世史料には「佐州金山」と記載されている。また外国人の描いた世界地図ティセラ図等にも「銀鉱山」と記載され、文字記録にも「銀」または「金銀」複合の島として認識されていた。佐渡の鉱山史家によると「佐渡金山」呼称は近代以降のものとされています。

大学生+高校生+外国からの留学生「われわれが気づいた問題点を以下指摘します。」

P1「①機械装置を用いることなく、②19世紀半ばまで完全に手工業で金生産が行われた。伝統的手工業にも関わらず、③17世紀には、量・質の両面において世界最大級・最高品質の金生産を誇った。…(以下略)…

P2④「古代より日本の金は、大量にアジアへ流れ込んだ。14世紀初めにヴェネツィアの商人マルコ・ポーロは、日本の華やかな金装飾を紹介し、著書である『東方見聞録』において日本を“黄金の国”と呼んだ。」

同頁⑤「佐渡島の金生産は、江戸時代における芸術や文化を支えた。華やかな金の装飾は、神社の門から襖絵にまで用いられた。」

下線部①の「機械化」の表現には疑問を感じる。広報ではP4での関連記述をみていただきたい。…「人類の鉱山史は、手工業で鉱山開発を行った機械化前と、16世紀の大航

海時代を境にヨーロッパを中心に進んだ機械化後の大きく2つに分けられる。「佐渡島の金山」は、前者の手工業による人類の金生産システムの最高到達点である。」と広報では、鉱山史を機械の使用で二期に分けているがこの区分はおかしい。なぜならば中世末ドイツ鉱山では機械の前身的「器械」が使用されている。佐渡の場合もわれわれが道具と呼ぶ器械が使用された。このイメージはアグリコラの『デ・レ・メタリカ』に図入りで詳述されている。本来近世佐渡鉱山を世界に申請するのであればドイツのこの鉱山技術書を読み込み豊富な図版との徹底比較を行うべきであった。また岩波新書の平田寛『失われた動力文化』1976年をみていただくと水上輪の原型とその科学史的位置づけが掲載されている。

下線部②についてであるが、前段として鎖国政策によって諸外国との交流を制限され「佐渡島の金山」は機械化されることなく、伝統的な手工業による金生産システムが発展した独自の手工業というとらえ方をしている。佐渡鉱山の土木工法・測量の知識は外国からのそれに影響されていることは以前から指摘されている。佐渡市教育委員会自体がかつて佐渡高校の数学教師だった金子勉による報告書『振矩術に関する調査研究』2010年、を出している。これ読むと鉱山の測量につながった地域学の存在が見えてくる。採鉱と鑄造の双方見据えてもすべてが手作業というわけではない。佐渡鉱山では手作業段階に加えて、機械段階以前の「器械」「動力的なもの」を併用していた。

水上輪(外国から伝わるらせん式くみ上げポンプ)や樋(とい)その他の道具が使用されている。またこのような手工業プラス簡易な「器械」は国内の他の鉱山でも使用された。

文化庁広報P4では世界遺産ポトシ銀山は機械化がなされたと記載する部分もある。この鉱山は高校世界史の教科書や図説にも人力と簡易な道具による労働の場が掲載されている。これからみても機械化はあたらぬ。

広報では、機械化された事例として世界遺産の南米ポトシ銀山が示す。しかしこれはおかしい。梯子や水のくみあげなど佐渡とそっくり。先住民やアフリカから連れてきた奴隷による過酷労働に依拠。水替え人足にも依拠した佐渡と似ている。

下線部③であるが、佐渡の金銀は17世紀半ばで枯渇している。これは鉱山史・地域史が明らかに新潟県史通史編近世でも明記されている。一連の日本史通史でもその考え方である。最新の高校日本史探究の教科書でもそのように書かれている。世界史探究の教科書では17世紀は銀経済で説明されている。

17世紀前半に限定してみると佐渡は金銀同時に生産していた。金に特化していない。そしてほんの一時期である。さらに、中国・オランダ・東南アジア等他国との貿易・流通史料に「佐渡金」はでてこない。世界最大級の金生産という説明は幻想・虚構である。

文化庁広報の源はここか！ しかしその根拠史料はない！ 2008年刊行の県・佐渡市『黄金の島を歩く』は佐渡の金が銀にかわり外国に輸出され世界経済を支えた、県・佐

渡市が 2011 年発行『再発見佐渡金銀山』のコラム「外国と佐渡の金銀」で佐渡の金が国際経済に与えたと書いてあります。

④の記録は説明の時期と佐渡の時期は異なる時代であり、『東方見聞録』の記述は東北地方の産金を意識したものと理解されていて、佐渡はまったく関係ない。佐渡があたかも中世から外国に金を輸出し外国人から意識されたかのような誤解を与えてしまう。

⑤に記載された「門や襖絵の装飾材料に佐渡金が使用された」という部分はかなり問題である。その証となる文献史料は確認されていない。

広報の説明では他に P3 で、「坑道や排水路などの生産技術及び鉱山集落や奉行所跡などの生産体制の双方の詳細を示す遺構が現在でも良好な状態で保全されている点でも世界に類を見ない」とする。しかしこのような景観は東北地方など他の鉱山にも見られる。佐渡の鉱山の特徴の本質は、周辺の水田開発際して鉱山技術が援用されたことである。

同じく広報 P3 では幕末のイギリスオールコックの『大君の都』から下記を引用している。…「かれらの文明は高度な物質文明であり、すべての産業技術は蒸気力や機械の助けによらずに到達することができるかぎりの完成度を見せている」これはオールコックの日本人一般に対する印象であり佐渡には来島したことがない。オールコックが日本文化を語るの『大君の都』ではなく『日本の美術と工藝』小学館スクエア、2003 年、である。しかし本書でも佐渡のことも金銀にもふれていない。

竹田講師「なるほど 皆さんの指摘は私も気づかないことがありました。実はまだ説明に加えるべき佐渡鉱山の特徴があるのです。これは先学や県や佐渡の自治体史で書かれてきたことです。24 年間にわたる佐渡の授業や講義で歴代受講生が指摘したことです。」

→奇しくも朝日新聞本年 6 月 13 日のコラム多事奏論(執筆田玉恵美)が佐渡世界遺産の価値づけについて各分野の研究者からの疑義を紹介していた。

これを読んでいると、高校生や大学生の感性は誤っていなかったこと、事実を純粹にありのままに見つめる姿勢が基本であることにあらためて気づかされた。以下他にも彼らが指摘したことがある。

A：西三川砂金山や鶴子銀山は井上鋭夫(新潟大学・金沢大学 中世史)が双方の鉱山の開発には浄土真宗の門徒や修験山伏を核にした山の民がけん引し、やがて差別の対象となったことが明らかにされ佐渡の自治体史『佐和田町史』にも明記されているが推薦書では言及されていない。鉱山遺跡としての日本の独自性を示す特性である。佐渡には鉱山社会を形成した熊野比丘尼関連の参詣曼荼羅などの資料が多数ある。

B：近世における無宿人・水替人足による過酷な労働と差別とそれらに起因する文化が存在したことが亡失されている。

C：水田開発の歴史や残り具合を見ると遜色のない新穂銀山や柿野浦金銀山など他にも中

世段階と思われる金鉱山があるが構成資産に入っていない。

D：戦国期の金山では現在の村上市(旧朝日村)の高根(鳴海)金山が佐渡よりも産出量(史料上では上納の量)が多かった。かつて桐原書店日本史B教科書には戦国期の鉱山の説明では佐渡はなく高根金山が掲載されていた。このことは佐渡の側では言及せず。また村上市側でも特に主張せず。佐渡と同じく高根金山も世界遺産に推薦したらどうかという提案がなされつつある。

E：佐渡鉱山の場合は周囲に本来文化的景観としての価値のある棚田が広がっている。鉱山技術援用の開発や水利が史料でも確認できる稀有な地域。今回の推薦では無視されている。石見で文化的景観のコンセプトを使用したから重複を避けている可能性が高い。

F：科学史では佐渡の百川治兵衛の和算研究を高く評価している。他の鉱山にはない佐渡鉱山知の一例として位置づけることができる。

G：東南アジアの鉱山は水田開発とセットであり景観や過酷な労働の痕跡もあり佐渡と似ている。なぜ比較しないのか？

H：秋田の小坂鉱山は労働者の遊楽施設がきちんと保存されている。佐渡相川にも遊興施設や遊郭があったときいているがこれらを鉱山関連遺産として認定されていない。それどころか相川の資料館にあった遊女の展示が最近削除されている。

I：外国人は近世佐渡鉱山をどうみていたのか？金のみではなく、金銀を包含した鉱山として見ていた。近世後期に長崎出島に勤務したなフィッセル『日本風俗備考1』平凡社1978年、では、佐渡以外の対岸の国や駿河からの金産出が多いとする。

J：近世末の佐渡奉行川路による『島根のすさみ』では過酷な労働や非人の存在を繰り返し記載する。

3 鉱山の負の性格への向きあい方

マレーシア高校生「佐渡の登録には私たちの母国でも日本が負の部分への説明をしない姿勢への批判があります。なぜできないのでしょうか？」

竹田講師「負の部分への対応ですが県も市もこれは国家レベルの問題で地元自治体は動くことはないと思います。しかしまずは県や市の問題であり地元が動くべきことです。同じ三菱系列下の尾去澤鉱山では戦時中の外国人労働事実の説明板や慰霊碑が存在します。また最近刊行された秋田県の『小坂町史』では戦時中の小坂鉱山での朝鮮人労働を明記詳述しています。佐渡だけがなかったことはありえないし他の鉱山経営者や自治体の姿勢に学ぶべきでしょう。佐渡と同じ三菱経営下の秋田の尾去沢鉱山では外国人捕虜の強制労働や中国人の強制労働者への慰霊行事や慰霊碑・説明板があります。また徳島県では県庁あげて板東俘虜収容所を世界記憶遺産に推薦しようとしています。学校現場でよく使用する教材には世界記憶遺産・山本作兵衛コレクション 2011年登録があります。九州の炭鉱な過酷な労働(まさしく負の内容)を活写し、これが評価され登録されたのです。しかしよくみると労働者たちのたくましい生活感も見えてきます。

ここで負の遺産というとらえ方を世界遺産に即して考えてみます。長年世界遺産登録に従事した稲葉信子は「負の世界遺産」という言葉から考えること『世界遺産年報』No. 16、2011年、日本ユネスコ協会連盟、で「負の世界遺産」に言及しているが日本での適用には消極的である。過去に登録された世界遺産の中で負の世界遺産とされるものは登

録基準(vi)により登録、ときには(iii)と併記して登録されたことを指摘し、このこと自体もあまり評価していません。

しかし日本国内の文部科学省所管の教育現場では「負の歴史」「負の(社会的・歴史)遺産」そして「負の世界遺産」は浸透し実践されています。例えば教科書会社の帝国書院では負の世界遺産の地図を作製し、中学校に提供しているのです。

鉱山=労働者の国内外からの奴隷や反体制の活動者からの確保・過酷な労働・落盤事故・病気などで基本的には負の遺産である。佐渡鉱山では等身大の人形自身がそのことを音声で発しています。負の遺産ではある事実をまず直視し、そこからどのように改善や工夫を試みてきたのか、これを検証し学ぶことが「負」から「正」へと転換させ未来につなげることになるでしょう。石見銀山の所在する大田市での人権条例を制定とそれをふまえた人権同和教育への熱心な取り組みはその好例です。世界遺産登録の経験が豊富で世界の事情にも通ずる岡田保良は「「関連性」-世界遺産登録にあたっての評価基準(vi)をめぐって」『世界遺産年報』No.17、2012年、で評価基準(vi)が遺産の背景にある出来事との関連性を指摘する基準であり、負の遺産とされるものに適用されることが多いことを紹介します。さらに、元ユネスコ事務局長松浦晃一郎は著書で以下について言及しています。…「セネガルのゴレ島は奴隷貿易の象徴ということで評価基準(vi)が適用され世界遺産となる。人類の負の世界遺産第一号である。」このようにユネスコ側では日本の一部専門家の意識とは異なり負の遺産への受容が確認される。また島根県の人権団体が指摘したようにユネスコの人権重視という方針にも合致する認識であることが確認できました。

最後に紹介したいのは姉崎正治によるヨーロッパや南米の一連の鉱山史研究です。鉱山の銀精錬の過程で生じた廃鉱石や逸失水銀を現代でも弊害を及ぼしていると指摘します。佐渡鉱山について特筆し、佐渡近海に漏洩排出した水銀やアマルガムが底泥化していることを『地質ニュース』第497号寺島滋他「海底堆積物中の金の地球化学的挙動」を引用し示しています。本来これらの指摘は世界遺産登録運動側で受け止めて解決策を県内スーパーグローバルハイスクール指定校の課題とクロスさせ島内にある大学の研究機関と共同研究を行うべきでした。

4 現在でも残る鉱山社会の差別の痕跡

近世の佐渡鉱山には根深い差別の問題が存在した。無宿人の存在と過酷な労働と差別、そして現地には刑場跡・牢獄跡が残り、『佐渡相川歴史資料集 10 金銀山水替人足と流人』(1984年)の史料には非人所が散見される。全国の鉱山史料の中で佐渡のような多数の史料が残るものは例がない。佐渡の考古学者佐藤俊策は新潟県部落史研究に佐渡の差別について論考執筆している。

ちなみに院内鉱山における牢屋については牧原成征「牢屋の誕生」『山川歴史PRESS』No.13 日本史 2023年、による分析がある(原直史の教示による)。

実は石見鉱山にも近世処刑場が存在した。人権重視のユネスコの世界遺産登録地であるにもかかわらず、説明板がないという人権団体の指摘が契機となり、鉱山が所在する島根県大田市では人権尊重のまちづくり条例を制定した。の指摘するとおり、ユネスコは「あらゆる差別無く、人権及び基本的自由を尊重する営みを通して、平和及び安全に貢献する

ことを目的」としていることにあらためて注目したい。世界遺産を有する大田市として、このユネスコの精神に基づき、人権尊重・差別撤廃の営みを積み重ね、ぬくもりのあるまちづくりを目指して、市民あげて取り組むことを決意し、2008年9月、「石見銀山遺跡の世界遺産登録を新たな出発点として、ユネスコの精神に基づき、人権尊重・差別撤廃の営みを積み重ね、温もりのあるまちづくりを目指して、市民挙げて取り組むことを決し」人権尊重都市宣言を行った。特筆したいのこの条例制定に向けては世界遺産登録主管課が中心となり地元住民とのたびかさなる話しあいをクリかえして難航しながらもようやく制定されていってことが記録から看取できる。⇒佐渡市の世界遺産担当課及び人権担当課に対して何度も石見のような人権問題に配慮した措置を提案したがなんの反応もない。

佐渡には鉱山社会が生んだ門付芸である春駒が伝わる。これは新潟県のすべての高校で使用されている『生きるV』という人権同和教育のテキストでもくわしく紹介されている。

県民の若い世代は、差別が含意された佐渡の芸能・春駒として記憶している。しかし世界遺産推薦では「やわらぎ」という差別の含意がない芸能のみが紹介されている。このことから佐渡世界遺産には人権への配慮がないことがわかる。春駒という民俗芸能は初春の祝福芸であり佐渡相川や山梨県塩山市に伝えられる。山梨では武田家の金掘衆の子孫金山衆に歴代伝えられた。『日本民俗事典』では佐渡の春駒も鉱山に起因するものとされる。『佐渡相川の歴史』資料編9は、「山師味方但馬が餅をつき鉱山にまいたら金になった」とする。春駒の研究には今村啓爾「金山と春駒」『中世遍歴民の世界』笹本正治「博士と金山」網野『中世を考える 職人と芸能』平成六年 I『大系日本歴史と芸能：音と映像と文字による 6巻 中世遍歴民と「芸能」2』がある。

5 本来あるべき文化財としての議論・保護の展望・市民意識・地域史成果への敬意

○佐渡市民は一枚岩ではない！登録運動スタート時は合併しておらず、座長だった旧赤泊村長は「世界遺産になっても経済効果がある地域とない地域が分かれている。自地域にカネも落ちず、活性化しないのになぜ経費面で協力しなくてはいけないのか疑問の声が多い。佐渡全体のライフライン整備のほうが先だ。島民が一丸となることはないだろう」と指摘していた。⇒現在も報道でとりあげるのは行政関係団体か観光関係者だけで島民の本音が取材されることはない。

⇒佐渡の自治体史、羽茂や赤泊の通史を読んでも南佐渡などは鉱山との関係は他地域よりも薄いことがわかる。鉱山だけでは佐渡の歴史や文化はくくれない。

○佐渡の登録運動により他の文化財保護への支障が出ている！佐渡の文化財全般の保護が後手にまわっている。また県全体の国指定文化財保護助成費の県負担がずっとゼロという他県にはない過酷な事態がつづき、県内の文化財所有者や財政規模の小さな町村は悲鳴をあげている。主格逆転の文化財保護である。

○佐渡島民が切磋琢磨して形成された学知が消えた！ 佐渡はかつて佐渡博物館と佐渡高校が知の拠点となり島民全体での歴史や文化の学びがさかんだった。参加者は脇に専門書など持参し報告者に鋭い意見をのべていた。しかし登録運動の一連の講演会は「すばらしいところ」を一方向的に説明されるものばかりで食傷気味となり島民の本来の学知や切磋琢磨いる雰囲気がなくなった。

○申請に向けての価値づけをめぐる議論がない！ 推薦の視点や説明、文化庁広報の文についての歴史学からの検討がなされていない。例えば『日本鉱業史研究』No.72 佐渡金銀山特集号 2022年 産金量などの論文が掲載されているが産出量の根拠として文献史料の史料批判や換算についての議論がない。佐々木準之介が『技術の社会史』2のP182で示した佐渡相川銀山上納灰吹銀納量と井沢英二「佐渡金銀山の産金量」の産銀量グラフを比較すると同じ史料を基本にとしているも微妙に異なる。この一事のように歴史学と自然科学間の議論が必要ではないか。

田中圭一「発掘のほうに先に進み理屈が勝手に一人歩きをして本当はどういうことだったのかという問題があとに残ってしまっている。』『第22回天領ゼミナール記録集』2007年⇒学際的議論が不足したまま進めてきた。

○自発的市民意識が欠如し主体性がない！ 長年の佐渡世界遺産登録運動を通して感じるのは一般の佐渡市民・新潟県民の文化財保護意識が醸成されていないことである。観光振興が地域振興につながるという「神話」を前提とした期待があるのみである。

また観光もオーバーツーリズム対応が想定されていないし、そもそも外国人への説明表記がほとんどない。また交通面での不便さは否めない。島内のバス路線は廃止・縮小の方向が決定している。使用されていない佐渡空港へのトキエアという飛行機の運行は予定されているが荒天時や冬季は期待できない。この空港から島内へのアクセスもない。船を増便しなければ島外から招くのは難しい。観光関係以外の島民が世界遺産登録について本音でどう思っているのか、意見を表明する場がなかった。そして文化財としての構成資産や切り捨てられた近代の鉱山文化をどう維持・保護していくのか、まずは島民あげての知恵出しと自発的体制づくりが必要ではないだろうか。

⇒高倉健一の指摘に佐渡も学びたい 同「世界遺産保護における住民による主体的活動の重要性について」神奈川県非文字資料研究センター『年報非文字資料研究』2011年

○本来あるべき文化財としての維持修理計画がない！ 道遊の割戸という佐渡鉱山のシンボルとなる露頭掘り跡は、一部崩落が始まっており、山の斜面の崩落防止が不可避である。しかしこれらの計画はまだできていない。さらに構成資産からは外したものの、近世の鉱山部分と一体のものとして見学がなされる近代以降の採掘施設の維持も課題である。ほとんどがコンクリートや鉄骨、石造であるがこれらの構造物への文化財としての修理マニュアルは全国的にも検討途上なのである。さらに加えて能登地震の後、佐渡には能登からの割れ残り断層があることが判明した。小木の海岸を津波がおそっていた。登録対象のエリアも防災面からの対応が急となる。しかし現段階では特に対策は検討されていない。能登では最新の耐震工法による巨額な経費により修理した文化財建造物も倒壊している。特に世界遺産となれば防災対策はかなり綿密に検討が不可避である。

また誰が鉱山関連の資産を維持し、修理・整備・防災設備の手当をするのだろうか？ゴールデン佐渡のみではできないし、人口減が加速する佐渡市や新潟県に限界がある。修理や防災などの事業に際して県の上乗せ補助が他県に比して少ないのである。佐渡市では募金もはじめているが、維持・修理計画がなければ集まらない。

近年、県内の国指定文化財に対する県補助はゼロであった。市町村へのしわよせが大きくなった。世界遺産への投入により本来あるべき姿がおかしくなった。

○先人・先学の地域知が無視されている！

佐渡鉱山史の本格的な研究は麓三郎『佐渡金銀山史話』小葉田淳『日本鉱山史の研究』が端緒とされる。後年田中圭一の単著等や本間寅雄(磯部欣三)が付加された。しかし世界遺産登録の事業では小葉田や本間の仕事が軽視されている。田中の仕事は鉱山以外の農村・農民にも広がりがあるが、世界遺産ではここには関心がないようである。

本間寅雄も田中圭一も近世佐渡は鉱山は「光と影」を強調している。生産や技術改良の背景を明記する必要がある。

地域知の成果「佐渡は日本の縮図である」『佐渡相川の歴史資料集 8 相川の民俗』1986年 佐渡出身の民俗学者北見俊夫の言葉 遠近法的視点提起 同様の指摘は佐渡を頻りに訪問した宮本常一もおこなっている。

<自治体史(佐渡)> ①相川町史編纂委員会『佐渡相川歴史資料集 3 佐渡金山史料』1963年 この本は新潟大学から金沢大学に異動した井上鋭夫の監修、東京大学史料編纂所菊地勇次郎も参加している。近世の相川の鉱山を語る基本史料である。

●竹田が以前から抱いていた疑問 1…田中圭一編『佐渡相川志』県立佐渡高等学校同窓会 1968年には相川の「勝町」(せりまち)に天文中新羅国ノ將軍ノ由ナル人渡レリ。此処ニ居ス。此井穿ル故ニ王井土ト名ク…と記載されるが、伝承はどのような歴史的背景に起因するのだろうか？ 疑問 2 『歴史公論 江戸時代の金・銀・銅』1980年 座談会江戸時代の鉱山をめぐって 大石慎三郎発言「上州で砥石山経営した市川五郎兵衛が信州の用水の開削に苦勞。上州側から朝鮮人を送るという手紙が存在。」と発言したが、なぜ朝鮮人がでてくるのか。労働者か技術者か？

『佐渡相川歴史資料集 3 佐渡金山史料』所収田中圭一「佐渡銀山の考察」→石見への朝鮮からの銀精錬法の伝授。神谷寿貞が媒介。田中は佐渡への朝鮮の技術が伝来した可能性を示唆する。相川の町内に神谷某がいたという。田中圭一は『佐渡相川歴史資料集 3 佐渡金山史料』解説で鶴子銀山が開かれた天文 11 年は石見で神谷が率いてきた宗丹・桂寿により新しい精錬が開始された天文 2 年から 9 年目にあたる。神谷が朝鮮人を連れて佐渡訪問したのではないかと推定する。さらに『新潟県史通史編 3 近世 1』1987 年では佐渡に渡った朝鮮人は精錬技術者としてとらえる。

②『佐渡相川歴史資料集 10 金銀山水替人足と流人』(1984 年 差別の集積がわかる

③『佐渡相川の歴史資料集 8 相川の民俗』1986 年 段丘の棚田 水利は鉱山技術の応用 トネ越えの道を開く 等高線に沿った鶴子銀山への用水通水

④共同研究報告 1975 年に地方史研究協議会佐渡大会が佐渡史学会と共催で相川町佐渡会館と小木町公民館開催された。この成果地方史研究協議会編『佐渡-島社会の形成と文化』197 として公刊された。特に金銀山と労働力・文化と伝統に主眼を置いている。白眉は座談会と佐渡地方史の成果と課題である。後者からは①佐渡高校郷土部が中世修験と

山の民の関係と近世に真言寺院に変質したことを明らかにした、②小菅徹也が相川は当初砂金山として稼がれていたことを明らかにした、等がわかる。

個別論文に磯部欣三(本間寅雄)の「佐渡金(銀)山の労働力-主な給源地に関する考察-」がある。「大塚部屋台帳」などの史料をもとに、佐渡鉱山の明治期の部屋(親方制度)を明らかにした。出身地別一覧をみると、朝鮮からの労働者は上位7番目、2.4パーセントを占める。北陸や東北よりも東京や朝鮮のような遠方からの就労者が多い。

<自治体史(新潟県史)>世界遺産関係者はよく読んでいない

<個人研究>①田中圭一『佐渡金銀山文書の読み方・調べ方』雄山閣 1984年 この本の解説には鉱山史の論点が示されている。

指摘A…磯部欣三(本間寅雄のペンネーム)から教示を得た大正6年から10年の鈴木部屋の戸籍帳を使用して以下の事実を整理した。…佐渡鉱山就労者 県内 96 長野 64 群馬 16 福島・山形が 11人 石川茨城朝鮮が各 9人。1年未満の就労 57人 逃亡 24 病気廃業 49 部屋就労者の前職は多様。周旋人の口ぐるまにのせられて佐渡にきた『新潟県史通史編 3 近世 1』1987年では近世金児(かなこ)制度、また部屋制度の存在について言及している。

指摘B…中世の頃金掘りたちをとらえたのは修験者であった。西三川砂金山には法名院塚がある。山伏は〇〇院と称された鶴子銀山にも巨岩による修験者たちの痕跡がある元新潟大学井上鋭夫の研究 山の民が鉱山開発にかかわったという提起⇒佐和田町史通史編Ⅱ』で紹介し敷衍する説明 第4節 中世の信仰 銀山と寺の成立 金掘り七助 修験の活動 銀山の修験竹田→宗教民俗学の五来重『日本人の地獄と極楽』人文書院 1991年では宇治拾遺物語の金の山は金ではなくて鉄。修験の表象とする。

田中+竹田→今昔物語の能登の金掘り集団が佐渡に渡り金をみつけたという挿話はくろがね=鉄掘り集団かつ山岳修験につながる存在を示唆するかもしれない。

②鉱山技術の源となる知識・学問の緻密な史料分析 金井町教育委員会『金井町文化財調査報告第9集「百川治兵衛和算書稿本」』1992年 金子勉 佐渡市教育委員会社会教育課佐渡学センター『振矩術に関する研究』報告書⇒現代の文理融合 STEAM教育の格好の素材となりうる。

③佐渡における熊野修験の役割の研究 萩原龍夫『巫女と仏教史』吉川弘文館 1983年佐渡の熊野系曼荼羅の分析 宮本袈裟雄 『里修験の研究』吉川弘文館 1984.10 竹田→後述する熊野修験と鉱山の関係を考える前提となる一連の先行研究であった。『相川の民俗』は屋敷の垣の内の内部に熊野社が入る事例紹介 やがて海の道は鉱山物資の輸送が主となる 能登の時国家のような存在の相川船登源兵衛家 津軽秋田新潟と取引

④海の道における鉱山 島の内部よりも海の道により外から繁栄がもたらされる。

小学館『海と列島文化』シリーズ。北見俊夫の日本海海上交通史の研究。

6 次世代による佐渡鉱山像の調べ・整理・提起

◇大学での集中講義 高校教員の傍ら委嘱された大学史学科の史料特殊講義(集中講義)において東南アジアにおける金銀銅生産・流通の高校生の分析を継承し深化させ、あわせて高校授業で課題とされた「金属細工・技術」を新規に扱った。講義では日本史・西

洋史・東洋史・考古学・歴史地理学専攻者で構成されていたため、それぞれの分野ごとのテキストや参考文献を指定した。歴史学専攻は徹底した史料読解とアクティブラーニング+サイレント・ダイアログ(用紙をまわし分野間、そして分野をこえて自由に重ね書き)を行う。

考古学・歴史地理学専攻はESDに基づく分析とプロポーザル形式の報告を実施した。集中講義後半では専攻別作業から専攻混合グループによる史料別読解へ変更した。学際的発見・思考を期待したものである。日本史専攻からは、史料読解をふまえモノの移動を概念図で描き従来の輸出品・輸入品を修正することになる。西洋史専攻者は、スペインやペルーの金銀細工師との東南アジアの細工師の比較を行った。東洋史専攻者はなぜ中国の金銀銅鉱山の環境を含めた比較を行う。地理学専攻者は、東南アジアでの金銀銅以外の錫水銀鉛鉄などを確認し、砂金と錫の類似点、砂金等を材料とした装飾・服飾を確認した。

⇒日本史・世界史専攻混合の報告では金銀銅 考古学・歴史地理学専攻では貨幣以外の用途使用が報告された。課題として①仏像の素材としての金使用、②日本国内で産出され輸出された金銀が装飾・服飾または絵画・彫刻の截金(きりかね、切金)・漆器・建物に貼る金箔・銀箔等)使用の可能性が提起された。



◇ マレーシア高校生への授業 +日本の高校生 英語による合同授業

(1)授業の内容 毎年新潟県立のある高校と交流していたマレーシア国民大学附属高校生への歴史授業…①アンソニー・リード著書要旨②日本史通史プリント(佐渡地域史)③富山県作成逆さ日本地図を活用し、日本と東南アジアの鉱山と水田開発の因果関係について考えた。

(2)問いかけ①「過去に日本から銀などが持ち込まれたという事実を知っていますか？」②「日本からの銀はどのような用途に供されたか、知っていますか？」③「ゴムやコーヒー以外の特産に鉱産資源があるという認識はありますか？」④「どのような鉱産資源がありますか？過去にはどのようなものが特産であったかわかりますか？」⑤「水田開発・維持とプランテーションに関係があると思いますか？」⑥「棚田等の開発は何世紀頃から本格化したかわかりますか？」→①・②は引率者も含めて「知らない、きいたことがない」

(3)マレーシア高校生+引率者から出た発言 「錫の鉱山跡に植林がなされ数十年で森林が復元された 環境破壊から森林を守るため 材木の輸出控える」

「アンソニー・リードの著書で 17 世紀における東南アジアにおける伝染病が 13 件も記載されている。7 年から 10 年ごとに繰り返されている。どこから持ち込まれたのか？国際貿易が背景にあるのか？また人口の 1/3 が死亡している。これにより地域の産業に変化があったかもしれない。」

(4)比較の視点 ①錫等の鉱山の痕跡を高校生とともに地図で確認しましょう。②棚田と鉱山をマレーシアの皆さんは自国のものと比較してください

(5)教師竹田が以前から抱いた仮説「東南アジアの半島部と島嶼部双方の水田特に棚田開発と鉱山開発は連動していたのではないか」「佐渡の鉱山開発と棚田開発と似ている」

(6)高校生+マレーシア高校生が発した問いかけ・仮説「なぜ錫等の鉱山稼業や水田開発

というともする異なる生産活動を同時に行う選択をしたのか」仮説「大航海時代前後で培われた生産活動が根付いたから現在でも鉱山と農業が重ねて行われている。」

(7)分析結果①日本の高校生や大学生が明らかにした輸出・輸入品の流れ図に加え錫などの鉱山や近代以前開発の棚田などをおとせた。鉱山と水田開発の因果関係が見えてきた。

②金のルート金銀細工についての情報は得られず今後の課題である。

「マラッカには 16 世紀前半に年間 50 艘から 60 艘の米を載せたジャンク船が来ていた。1615 年ジャバラで年間 2,000 トンの米を買うことができた。ジャワ島南部は 1700 年ごろ毎年 2000 トンから 4000 トンの米をスラバヤに運びこむことができた。」アントニオ・デ・モルガ『フィリピナス群島誌』1609 年 農耕畑作せず。鉱山も砂金採取場も開発せず。銀が異教徒に渡りエスパニヤ人には戻らない。」



マレーシアの錫鉱山



錫鉱山の労働再現



マレーシアの棚田



海をのぞむ佐渡の棚田 緩傾斜 鉱山と因果

◎次世代とともに地域知を学ぶことで見えてきた本来世界遺産として発信すべき佐渡鉱山像さらに疑問の解決の糸口が見えてきた！

⇒鉱山+水田開発(棚田景観)+信仰(熊野修験、一向宗)

→唐津船が運ぶの外国の知識・技術 鉱山 →水運他による東北地方鉱山との交流

掘削技術↓水利開削

修験者の寺社開基↑門徒の村のお堂

水田 水の信仰 ← 山越えルート 信仰(熊野修験+一向宗)

(傾斜地水田+海をのぞむ段丘の棚田)

(熊野比丘尼絵解き)

(開発の過程がわかる古文書)(揚水の水車輪使用)

国内鉱山の周辺の多様な水田景観は佐渡が顕著

鉱山+熊野信仰痕跡が顕著



傾斜地水田に加え佐渡は海をのぞむ棚田の景観が特徴的であり開発・開墾技術・水利の過程がよくわかる。国内の鉱山では他に類例がない。また鉱山絵巻で描かれた揚水器具や掛樋が水田でも使用されている。これは中世末のドイツ鉱山の絵入り技術書である『デ・レ・メタリカ』でも類例を確認できない。



確認①近世の佐渡では鉱山と棚田が農民たちによりつながっていた。排水と水田の水利確保に集約される。鉱山周辺の農村より労働力の放出がみられた。先学の指摘では佐渡の農漁民が鉱山労働に駆り出されるのは寛文 10 年(1670)以降であり水上輪という揚水の道具を操作する樋引き人夫にあてられたとされた。

⇒しかし佐渡の自治体史などを調べてみると、近世初期からみられる。『佐渡相川の歴史資料集 3 佐渡金山史料』所収の「川上家文書」によると慶長 10 年代、上相川丹波沢の水を長い樋を使い京町筋に水を引いていた。寛永 2 年(1625)銀山の割間歩から水金沢まで水抜き坑道を掘っている。排水用の樋設置費用や水替樋口人足を村から徴収していた。慶安 3 年(1650)における小川の開発では川の上流の堰口から段丘丘へ 3500mの水路を引く。岩山や崩れ場が多く工事は難航したが沢あいに掛樋をかけ、岩石の露頭は鑿で水路を削り、斜面には江肩をつけ、石垣を築き、平地でも川の堰止めをし、水たまりをつくり、水田まで揚水する樋を立てた。掛樋ではないもので鉱山の坑内の水替え用に使用したものを転用した。…「海をのぞむ棚田について-水利確保・開発者・鉱山技術-」『棚田学会誌日本の原風景棚田』第 10 号 2009 年 棚田学会 査読論文

⇒このような史料や景観は国内の鉱山では確認できていない。

また佐渡の鉱山社会には熊野修験の比丘尼たちの絵解きや信仰流布が見られた。

確認②竹田和夫「海と山を臨む佐渡の熊野信仰」『聖地への憧れ 中世東国の熊野信仰』平成 17 年 神奈川県立歴史博物館⇒修験で使用された道具が常学院の什物や赤泊の勝蔵院の笈が相川に所在。個人蔵の熊野参詣曼荼羅・十界曼荼羅もある。歩き巫女と修験山伏の夫婦の痕跡。巫女は口寄せ・湯立行為により鉱山鎮護を行う。修験者は大地を鎮める供養を行う。

参考 西山克「地獄を絵解く」網野『中世を考える 職人と芸能』平成六年⇒熊野十界曼荼羅 安土桃山時代と修験されている。この西山の研究に長谷寺「甘露図」の研究論文がある。成果は『熊野観心十界図という誘惑-東アジアの死霊救済儀礼をめぐる精神史として岩波書店から刊行された。…16～17 世紀に朝鮮半島の甘露図が日本に持ち込まれ熊野観心十界図等に影響を及ぼした。西山の研究「日韓仏教儀礼の比較的研究-16・17 世紀の薦度儀礼と仏画」2009～2011 は「日本の十界図・六道絵・地獄絵の世界で、研究史上特異な位置を占める熊野観心十界図は、16・17 世紀の境にその原図が制作された。制作の直接の機縁となったのは、朝鮮社会で制作された甘露図が、豊臣秀吉の東アジア再編計画を通して日本社会に流入したことにある。甘露図は水陸会の儀礼の過程とその実修される場を、救済対象である死者の多様な死に様とともに描いた絵図であり、16 世紀半ばに成立したものと思われる。

◇教育からの位置づけの必要性和見えてきた審査時「普遍的価値」の疑問点

2023 年日本社会科教育学会竹田報告「多面的性格を見据えた世界遺産教育の実践 -文化財保護行政と歴史教育・地理教育の懸隔をつなぐ-」〈等閑視された教育から見た世界遺産 ユネスコは教育機関〉…教育における世界遺産学の位置 世界遺産条約第二十七条では、教育や広報の重要性が定められている。またユネスコは「若者のための世界遺産教育プロジェクト」の一環で「世界遺産ユースフォーラム」を各国で順次開催している。日本国内の各種教育機関でも世界遺産は教育に取り入れられており、高等教育機関では「世界遺産学科」が設置され、専門科目外でも世界遺産の講義が設定されている。日本では 2000 年 3 月に日本語版のユネスコ著、鹿児島県訳編『若者の手にある世界遺産：学び、育み、行動する：教師用世界遺産教材：協同学校プロジェクトネットワーク』2000 年が刊行されているが配布量が限られており、日本の教育現場での普及には至らなかった。城戸一夫『総合学習に役立つみんなの世界遺産 (1) 世界遺産を見る・調べる・守る(総さくいん)』200 年、岩崎書店、刊行されたが活用されなかった。社会科教育学の学史を確認してみると、日本における本格的な世界遺産教育は、奈良教育大学の田淵五十生や竹田和夫の実践が先駆となる。田淵五十生、中澤静男「E S D を視野に入れた世界遺産教育 -ユネスコの提起する教育をどう受けとめるか-」、『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』16、2007 年、『世界遺産教育は可能か (奈良教育大学ブックレット 5)』2011 年、竹田和夫「高校日本史と大学講義の接続実践①-文化財(世界遺産)を素材に | 『歴史と地理 625 日本史の研究 225』山川出版社、2009 年、である。奈良教育大では E S D 視点の世界遺産教育を実施している。田淵を核にした分析は淡野明彦や祐岡武志の成果も生んでいる。淡野は「高等学校地理学習における世界遺産の指導の実践」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』19、2010 年、を著わし、「地域学習における教材」「国際協力の重要性を学ぶための教材」の 2 点を挙げ、さらにその他の教科における文化遺産の位置づけについては「遺産そのものの価値認識を高めることに加え、周辺地域の人々の生活の変化から多面的な見方、考え方を養うための教材」としているが島根の 2 つの高校はこの方向性を体現している。祐岡は『世界史教育内容編成論研究:ESD の観点からの再構成 (阪南大学叢書 121)』風間書房、2022 年をまとめた。祐岡は世界史学習の素材として世界遺産を E S D や危機遺産の観点から活用する。

世界遺産教育の課題 このような歴史学ベースの世界遺産学に匹敵する勢いを見せるの

が近年の地理教育からの世界遺産へのアプローチである。特に世界遺産委員会で慎重に検討される「顕著な普遍的価値」について現在の日本の認識でよいのか、再考をせまっている。以下例示してみよう。金野誠志「文化遺産の「顕著な普遍的価値」を相対化する世界遺産教育の試み：「紀伊山地の霊場と参詣道」『地理教育研究』全国地理教育学会、22、2018年、同「世界遺産として文化遺産を保全する意味や意義を考える世界遺産学習：「顕著な普遍的価値」の解釈や適用に焦点を当てて」『global education』日本グローバル教育学会紀要編集委員会編2018年、日本グローバル教育学会、同「文化遺産の「顕著な普遍的価値」を相対化する世界遺産教育の試み：「紀伊山地の霊場と参詣道」八鬼山問題を事例として」『地理教育研究』22、2018年、同「問われ続ける「顕著な普遍的価値」の理解を促す世界遺産学習の試み：文化遺産に関する知識と価値観の形成過程に着目して」『地理教育研究』全国地理教育学会24、2019年、永田成文「異文化理解を深める地理ESD授業プログラムの開発：世界遺産の顕著な普遍的価値の伝達を通して」『地理教育研究』全国地理教育学会、32、2023年、これらの成果は、教育の枠内にとどまらず、文化財保護の認識との懸隔や教育からみた普遍的価値の見直しも提起したところに大きな意義がある。また『地理・歴史・SDGsの視点でひも解く日本の世界遺産』全3巻、帝国書院、『世界遺産ではじめる地理総合』2023年、世界遺産検定事務局、2023年にも結実している。近年の教育現場での世界遺産の扱いはユネスコがけん引してきたESDの観点にとどまらず、SDGsの目標にある「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」に依拠し総合的な学習の素材とする傾向もある。島根中央高校や王子総合高校のように学校あげて取り組むところもある。社会科教育の枠内で整理すると、体系立てて世界遺産学を推進しているのは地理教育だといえる。ただし、課題もある。祐岡のような危機遺産という認識や地理教育が提起する世界遺産の現代的諸課題のような問題の掘り下げには「負の遺産」という切り込みが不足している。世界遺産に登録された各国一覧を見ると、過酷労働、奴隷貿易、囚人、戦争などマイナスの歴史的価値づけがなされたものも多い。世界遺産ではないが秋田県の花岡鉦山の悲劇の歴史に取り組む秋田大学附属中学校の姿勢を世界遺産教育にも取り込みたい。そしてもう一つ大きな課題がよこたわる。それは文化庁がユネスコの①ESDの考え方による世界遺産、②近年のSDGsによる世界遺産を文化財の登録・保護で意識していないことである。むしろ文部科学省のほうがその所管する学校教育で、文化財を正負の価値づけや課題解決に取り組む学習を推進してきた。帝国書院が発行黒板掲示した地図「世界の平和と人権」ではポトシ銀山を負の世界遺産も紹介する。以上、世界遺産の審査基準である普遍的な価値を高校生や大学生が見直すユネスコ模擬審査実践を通して、多面的性格の掘り下げの必要性を示し、歴史・地理教育や総合的な探究での活用の可能性を展望したい。

◇ユネスコ国際委員会模擬審査の試み 高校生や大学生が主体

7 国際委員会に向けて

佐渡世界遺産が国内の他所の世界遺産とは異なる経緯と問題を有していることを整理し所見・提案をも付言した。登録が順調に進むのか、登録延期の意見などが付されるのか、現段階では見通せない。6月上旬に示されたイコモスからの勧告に基づく七月

のインドでの国際委員会での決定を注視したい。※勧告というのは、世界遺産の一覧に記載することは適当かどうか、つまり登録が適当かを4段階で評価するもので、適当とされれば「記載」、次回以降に再審議となれば「情報照会」、そのほか、「記載延期」「不記載」と続きます。これを踏まえて7月の委員会で最終的な決定が行われます。これまでイコモスから登録が適当だと勧告されれば、そのまま認められる可能性が極めて高いと言われていました。ただ、今回は反発している韓国が21か国で構成される委員国の一つに選ばれています。登録には委員国の「全会一致」が慣例となっているため、判断が注目されます。韓国の報道…ICOMOSは世界文化遺産登録審査対象に対して書類の検討や現場実態調査などを経て、「記載 (inscription)」「保留 (referral)」「記載延期 (deferral)」「不記載 (non-inscription)」という4つの勧告案評価結果のうちの一つを決定する。ICOMOSの「referral」は不備がある部分に対して追加資料提出などの説明を要求することだ。資料を補完すれば、その年または翌年に開かれる世界遺産委員会会議で世界遺産に登録される可能性がある。日本のメディアは「referral」について「保留」ではなく「情報照会」と報じている。ICOMOSは勧告で、「鉱業採掘が行われていたすべての時期を通じた推薦資産に関する全体の歴史を現場レベルで包括的に扱う説明・展示戦略を策定し、施設・設備などを整えること」と注文した。

イコモスの評価結果及び勧告の概要（「佐渡島の金山」）

①顕著な普遍的価値（OUV） イコモスは、本推薦資産が、他の地域で機械化が徐々に導入されていた時期に、完成された手作業による採鉱と製錬技術を継続したアジアにおける他に例を見ない事例として世界遺産一覧表への記載を考慮するに値する価値を有すると考える。

②勧告 イコモスは、情報照会を勧告し、以下の点について追加情報を要請する。完全性・真実性の条件を満たすために、江戸期より後の証拠が大部分を占める相川上町の北沢地区

しもやまのかみまち さかしたまち きたざわまち やじゅうろうまち
（神町下山之・坂下町・北沢町・弥十郎町）を資産範囲から除き、推薦資産の範囲を修正すること。 構成資産「相川鶴子金銀山」の緩衝地帯を沖合いに拡張させること。鉱業権の所有者が、推薦資産又は緩衝地帯の範囲内において商業採掘を再開しないという明確な約束を示すこと。

③評価（1）適用する基準について ○ イコモスは、本推薦資産が、他の地域で機械化が徐々に導入されていた時期に、完成された手作業による採鉱と製錬技術を継続したアジアにおける他に例を見ない事例として世界遺産一覧表への記載を考慮するに値する価値を有すると考える。世界遺産として合致する基準は（iv）である。○ イコモスは、文化的伝統を示す比類ない物証が十分でないため基準（iii）は当たらないと考える。ただし基準（iii）を示すものとしていた生産体制や町並み等の管理に係る遺構は基準（iv）に該当するものとする。

（2）完全性について 北沢地区は、江戸期における採鉱技術と社会文化システムを反映していないので当該地域を資産範囲から除き緩衝地帯にした場合に完全性が満たされると考える。

（3）真実性について 北沢地区は、江戸期における採鉱技術と社会文化システムを反映していないので、当該地域を資産範囲から除き緩衝地帯にした場合に真実性が満たされると考える。

（別添） 比較分析について

イコモスは、本資産を世界遺産一覧に記載するための適切な比較分析が行われていると考える。保存状況について 相川上町などにおいて近年の開発が見られるものの、資産全体の保全状況は良好であると考え。 記録類の保存状況は良好である。

資産に影響を与える要因について

イコモスは、資産に影響を与える主な要素は地滑り、植生の繁茂、森林火災、森林の過伐採、洋上風力発電施設の設置であると考え。

(6) コミュニティの参画

イコモスは、推薦資産に関する更なる調査、提案されている顕著な普遍的価値および包括的な歴史の発信において、地域コミュニティが参画することが肝要であり、長期的に担保されるべきと考える。

④ 追加的勧告 イコモスは、締約国が以下の事項について配慮することを併せて勧告する。

- a) 「相川鶴子金銀山」の緩衝地帯全域を重要文化的景観に選定し、保護措置を強化すること。
- b) 事業規模ではなく、提案されている顕著な普遍的価値に対する潜在的影響に基づいた遺産影響評価の仕組みを、景観計画に組み込むこと。
- c) 将来にわたって、考古学的調査が一貫した学術的見地から行われるよう、長期的な調査戦略を構築すること。
- d) 地下遺構への影響が最小限となるよう、森林管理のガイドラインを策定すること。
- e) 鉱業採掘が行われていたすべての時期を通じた推薦資産に関する全体の歴史を現場レベルで包括的に扱う説明・展示戦略を策定し、施設・設備等を整えること。
- f) 収容力調査の実施及び来訪者管理戦略の策定を行い、観光客の増加が推薦資産に負の影響を与えないようにすること。
- g) 包括的保存管理計画より前から運用されていた計画を見直し、それぞれの内容が提案されている顕著な普遍的価値の長期的な保全と一貫しているか確認すること。
- h) かつて採掘が行われたことが明らかになった区域について、将来国の史跡として指定することを配慮すること。

竹田⇒イコモスは国際記念物会議という性格上記念物中心の評価になることは理解しているがその価値づけの根本の一つである歴史的評価についての点検はなされたのか？

竹田⇒登録が進んだ場合には将来的展望として、委員会席上でイコモス勧告以外の意見が出て見直しが見直しが課せられた場合、いずれにしても東北地方の鉱山も石見銀山や佐渡鉱山とともに世界遺産としての拡大統合の対象とならないか、検討すべきではないかと提案したい。これは東北地方の金・銀・銅鉱山が全国的にも歴史史料が豊富で遺構の残りがよいからである。そして石見銀山・生野銀山・佐渡鉱山との技術面や関係者の人的交流があったからである。歴史的事実に基づいた文化財としての鉱山のネットワーク化は現代の地域衰退改善への歴史学が果たせる役割といえるのではないだろうか。有形+無形統合の初発として佐渡全島を鉱山文化とつながれる水田開発と信仰の島というコンセプトでの世界遺産に向けての発進も希望する。

→新潟県内でも歴史的鉱山交流は可能 平尾良光他編『大航海時代の日本と金属交

易』思文閣出版 2014年に平尾他による「江戸時代初期に佐渡金銀鉱山で利用された鉛の産地」という分析科学による論文が掲載されている。鶴子鉱山では現在の村上市域の葡萄鉱山の鉛や加茂市域の小乙鉱山の鉛が使用されていることが明らかになった。また佐渡の鉱山は他にも魚沼の上田鉱山その他の鉱山とも関連があった。このように佐渡鉱山と精錬用の鉛や技術交流のあった鉱山所在地同士で交流ネットワークをつくることはできないか。現在の世界遺産登録推進事業では金を運んでルートの自治体で一過的イベントが開催されているがもっと本来的な採鉱や精錬に相互補完した地域間の交流を見直すべきではないか。

○登録されても残る課題 ①佐渡が世界に与えたという影響、事実に基づかない誇大な説明は外国や後世の日本人から指摘されるであろう。②佐渡の割れ残り断層があることが自明のこととなり小木湊には津波もきていたことが判明した。能登地震の震災が想定される。世界遺産構成資産や周辺地でのいままでにない震災対応が不可避となるか現段階では何もできてない。能登では1,000,000,000円かけて耐震対応した寺院が倒壊した。③登録までの県支援はなくなるし維持や修理費用は最低限しか期待できない。自前で準備が必要。④修理の届に関する認識ができてないのでトラブルがおこる。⑤登録の根拠となった史資料が確認できない。⑥ゴールデン佐渡所蔵の近代史料が見れない⑦本間寅雄遺族が寄贈した史料が見れない。⑧出土遺物も佐渡市埋蔵文化財センターや展示できる資料館がない。⑨研究ができる人材がない。近世史や古文書学、建造物の専門職員配置が必要。

おわりに 紹介したい言葉・次世代が描く未来の佐渡像

①一志茂樹信濃史学会会長「わが国文化財保護の実態と問題点 主としてその行政面にメスを加えて」『信濃』第26巻第3号「(地域にあるからこそ地域特有の課題や地域文化のあり方が見えてくる。)文化財保護はわれわれの大きな喜びであり学究である。行政に依存するものではない。このような観点での文化財保護法を。」

②本間寅雄佐渡博物館長…常に弱者の立場からの歴史の掘り起こしを行い、島民に親しまれた本間は逝去する前に島内各地での講演で下記について訴えた。…「いま佐渡世界遺産登録の動きがあるが、私は世界遺産になってもならなくても、どちらでもかまわない。いままでなされなかった佐渡島民が佐渡の歴史や文化について知り、今後の佐渡を語ることをしませんか。」本間の提起は現段階では行われていない。

③田中圭一『佐渡金銀山文書の読み方・調べ方』1984年のあとがき…「自分がわからないものを数字や史料でどんなに固めてみせても、そこには血の通わない虚構がそびえるのみである。古文書読みの古文書知らずという格言は我々のために用意された明言であることを肝に銘じておく必要がある。そんな意味から私は、鉱山史の勉強もあまり技術史とか経営史とかに限定しないで、いろんな角度から勉強する方が良いと思うのである。具体的には鉱山を技術や経営や制度・藩財政とのかかわりなど、また鉱山町の生活や商業活動や農村の問題とかかわりあわせて考えていくのが一番良いと思う。…村をたずね、人に会い、ひとつひとつ記録をとること、自分のこの目で確かめることこそ、自分が歴史を創ることになるのだという初心を忘れないでいたいと思う。」

○ 次世代が描く未来の佐渡像

<登録された場合>

- ・世界遺産の鉱山のみならず世界農業遺産の水田やジオパークの地質も含めたトータルコーディネートが必要。
- ・登録のコンセプトや説明、手順など意見のあったことに基づき細かく見直す。意見があったことにはきちんと説明できるような根拠を整備しておく。特に史資料の突合や要請があった場合閲覧できるような準備を進める。ゴールデン佐渡所有の戦時中の資料は自治体史においてすでに公になった「広知の資料」であること、個人情報保護法改正死者の情報は対象外となったことから閲覧等の理解を求める。近世・近代史の専門の職員採用と適切な部署への配置。
- ・鉱山だけではなく佐渡の全体像を描いた上で構成資産に焦点をあてる。
- ・懸案の島内のライフライン整備、縮小されるバス路線など交通の課題へ対応する。
- ・観光客の持続は先行例からみるともって2年程度。観光だけでない世界遺産の活用をいまから考える。

<登録が保留され別の理由で登録が進まない場合>

- ・いままでの登録にかかるコンセプトはじめ作業全体を見直す。
その観点は本報告で示したものを参考とする。
- ・石見銀山をベースに生野銀山、院内銀山も含めた群としての追加登録の可能性や有形+無形の第一号として申請し直す。
- ・市民・県民に登録の理由や必然性をきちんとした根拠資料(学校教育の教科書・図説と矛盾しないもの)を示しながら理解を得る。
- ・規制や修理維持計画。見積と負担割合についても事前に説明して意見交換する。

◎登録の有無にかかわらず、歴史的事実・事象に基づく価値づけや説明に修正したい。

制度上の世界遺産ではなく、「遠野遺産」のように自発的な文化のフラッグを掲げる。関連自治体が地域の鉱山や佐渡その他の鉱山との関係を明らかにする。現在の関係自治体の住民が比較し交流する機会を設ける。

⇒シビック・プライド醸成による地域衰退への歯止め、学校教育から生涯学習に向けて学びつづける道をみんなで切り開く。その先頭は次世代。